

巻 頭 言

日本社会事業大学学長
神 野 直 彦

「大学らしい大学」の夢

「日本から大学らしい大学が消える年だ」。国立大学の法人化が決まった年の名誉教授会で、今は亡き大内力先生が述べられた言葉である。この言葉は私の脳に突き刺さったままである。

私は当時、東京大学経済学部長を務め、国立大学協会の法人化問題に対応する財政問題部会の責任者を仰せつかっていた。それ故に国立大学の法人化を阻止できなかった私の歴史的責任の大きさに、私はただ立ち竦むだけであった。

「日本社会事業大学を大学らしい大学にして欲しい」。潮谷義子日本社会事業大学前理事長が私に、日本社会事業大学の学長へ就任するように、要請するにあたって述べられた言葉である。「大学らしい大学」を消してしまった私に、「大学らしい大学」を追求する権利はないのではないかと思いつつも、私は残された最後の力を振り絞り、潮谷先生と共に夢を追い求めることにしたのである。

潮谷先生は現在、熊本にある慈愛園の理事長をされている。慈愛園は令和に改元されるとともに、創立100年を迎えた。その創立100周年の記念式典で、私は記念講演を務めるように、潮谷先生から命ぜられたのである。

この記念式典の前々日から前日にかけて、奇しくも天皇陛下の即位にともなう大嘗祭が挙行された。大嘗祭は前々日に夜の帳が降りるとともに19時頃から挙行され、約3時間半の式典を休憩を挟んで二度実施される。この大嘗祭に私は参列し、皇居を退出したのは、前日の早朝4時半頃であった。私は自宅に戻り着替えるとともに、慌しく熊本へと向かったのである。

潮谷先生が私に与えた記念講演の演題は、「今こそ求められる分かち合いの心」であった。この演題を潮谷先生が選んだ意図に思いを巡らせながら、私は徹夜のために機能していない脳で、日本社会事業大学を「大学らしい大学」にするというミッションを果しているかと省察せざるをえなかったのである。

私は大学を愛している。大学は人間の知恵が生み出した偉大な制度である。近代の大学は11世紀頃から北イタリアの諸都市が自治権を獲得していく過程と、踵を接するようにして形成されていく。「都市の空気は自由に」という至言どおりに、都市が権力からの自由を獲得していくように、大学も権力から自由を獲得していくことになる。

潮谷先生が私に与えた使命とは、官治に翻弄されていた大学を真理を探究する本来の大学へ改変することである。それこそ文字どおりの改革である。改革とは本来の姿を取り戻すことである。改革(reformation)は一語で宗教改革(Reformation)と意味する。宗教改革は本来の神の秩序を取り戻すことだからである。

私は潮谷先生と共に、日本社会事業大学を「大学らしい大学」にする夢を追い求めた。この夢は正夢となったわけではない。というよりも、「未完の改革」として未来へ向かって追い求めなければならない課題となっている。

日本の大学は学問の自由と大学の自治の喪失という濁流の中で跪いている。こうした流れに抗して、日本社会事業大学を「大学らしい大学」にする夢を开花させるには、学問に対する深い愛と、学問の自由を守ろうとする強い意志が、大学の構成員に求められることになる。

潮谷先生と共に私は、夢だけを食して生きている生物のように、夢を追い求めた。夢を目指す弱々しい歩みが、どれだけ前に進んだのかはわからない。しかし、少しでも前に進んでいるとすれば、それは志を共有する大学の構成員の方々の愛と情熱の賜物である。

「研究と教育」の場である大学は、学生と教授との組合組織から誕生する。つまり、大学の学生と教員との共同作業によって真理を探究する場なのである。したがって、当然のことながら、大学の構成員は、学生と教員となる。もちろん、これに職員が加わる。しかし、大学の構成員として大学を巣立っていった卒業生が加わることを忘れてはならない。

『日本社会事業大学研究紀要』は日本社会事業大学の構成員の研究活動を通じる交流の場である。この交流の場を通じて、日本社会事業大学の構成員が、研究活動によって近づき合い、学問と大学への愛を深めていくことを願うばかりである。